

序

北海道大学附属図書館にとって、北方資料室は誇るべきものの一つである。ここには北辺地域関係資料が網羅的に収集されており、それは北海道から千島・サハリン・シベリアさらに日露交渉史関連に及び、また収蔵資料の種類も、特色ある和洋図書のコレクションのほか、写本・古文書・古地図・書画・写真・レコード等の特殊資料にわたっている。それらは質量ともに貴重な収集として、研究者をはじめ各方面の利用者たちから高い評価を受けている。

これらの資料は、本学の前身である札幌農学校時代から蓄積されてきたもので、とくに昭和十二年に学際的な研究機関として北方文化研究室が附属図書館に隣接して設置された以後は、明確な方針をもって資料の収集が始められた。その頃には北海道庁から道史編纂史料が多数寄託されたほか、篤志家からの貴重な資料の寄贈も少なくなかったといわれる。昭和四十二年北方文化研究室の閉室に伴い、その資料を合体した当館では北方資料室を設けて資料の整理と利用をはかり、さらに新たな収集によって少しでも資料の空白を埋めるべく努めてきた。それとともに同室では特殊資料の冊子目録の刊行にも着手し、すでに『北海道関係地図類目録』や『開拓使外国人関係書簡目録』（国立大学図書館協議会賞受賞）等を作成しているが、いままた『日本北辺関係旧記目録』の完成をみたことは、まことに喜ばしいことである。

本書は北辺地域に関する写本類の目録であるが、それらの資料は一般には知られることが少なく、普通の図書館では利用の困難なものである。北方資料室では、他の所蔵機関の協力を得つつこの種の資料の充実に努めてきたので、ここには従来の類書にはみられない豊富な資料が収録されていると思われる、また各資料には懇切な解題が付されている。この目録が今後の北辺地域の歴史研究に貢献するところ大なるものがあると確信し、かつ期待してやまない。終りに、本書の編集を担当した北方資料室主任（専門員）秋月俊幸氏の御労苦に対して、深い謝意を表したい。

一九九〇年三月嘉辰

「北辺資料」について

江戸時代から明治初年の日本北辺地域に関する資料は、同時代の他地域の資料と較べると著しく明確な特徴もっている。そのころ北海道・樺太・千島諸島はアイヌ民族の居住地であったために、それらの資料の中にはアイヌの風俗・習慣および生活についての記述が数多く含まれている。またその地方は北方より南下するロシアとの接点にあったことから、ロシアへの関心も色濃くあらわれており、日露の關係にふれた文書・記録類も少なくない。江戸時代には北海道にも松前藩がおかれていたが、十八世紀末以来幕府は二度にわたって蝦夷地を直轄し、その時期には東北諸藩による蝦夷地の警備や経営が行なわれた。明治初年には全国の諸藩による北海道の分領開拓さえ実施されたのである。それ故北辺資料は、単なる日本の辺境に関する地域資料にとどまらず、日本史における重要な一分野の史料となっている。

とはいえ、このような北辺資料もその残存状況の把握には問題があり、その全容を知ることが必ずしも容易ではない。幕末期の箱館奉行所書類や明治初期の開拓使文書の多くは幸いに道内に保存されているが、十九世紀初頭における幕府の松前奉行所書類の所在は明らかでなく、松前藩の藩政資料に至っては戊辰戦争の兵火のなかで失われている。それらの資料を部分的にせよ復元するためには、周辺資料もしくは写本資料を発掘することが必要である。さらに北辺資料探索の困難として、それが在地資料のほかに、日本各地から北辺地域を訪れ、一時的に滞在した人々によって作成された記録類を多量に含むという特殊な事情がある。それらは全国に散在して残されているために、世間に知られず埋もれている貴重な資料も決して少なくない。さらに北辺資料のほとんどは当期刊行されることがなく、その一部が写本として流布するにとどまったので、それらをまとめた形で所蔵する機関も極めて限られている。(北辺資料の全国におけるおおよその所蔵状況を知るためには、岩波書店刊行の『国書総目録』全九巻が便利である)。

以上のように分散した北辺資料を再構成するために、北海道では早くから積極的な資料の収集作業がすすめられてきた。すでに明治初年に開拓使は資料収集とともに写本複製に力を注ぎ、それは北海道庁の道史編纂掛に引

継がれ、現在では北海道立文書館の業務の一部となっている。市立函館図書館が、先見の明をもった初代館長岡田健蔵氏の努力で、今日北辺資料のメッカとなっていることは人の知るところである。北海道立図書館も第二次大戦後はとくにこの方面の資料収集に意欲的で、道内のほか東京および東北地方の諸機関が所蔵する北辺資料のマイクロ・フィルム化に努め、すでにかんがりの蓄積を有している。北海道大学でも昭和十二年に全学的な研究機関として北方文化研究室が設置され、北辺資料の収集についても「資料を本学に求めて得られざるものなしといふ域に達せんことを」期待していた。その機能は現在では附属図書館北方資料室に受継がれている。

前述のように多岐にわたる北辺資料の目録を編集するに際して配慮したことは、少なくとも広く世に知られた資料についてはできるだけこれを収録し、北辺資料の概略を示すことであつた。そのことは多くの所蔵機関の協力を得て、複写物を手入することによりかなりな程度に実現されたが、ここに特記しておきたいのは、道内のほか全国から北方資料室を訪れた多数の研究者たちによる積極的な情報提供のことである。その結果この目録に加えることができた新資料や重要資料は枚挙に暇がないほどである。ここでは一々芳名を記すことを省略したが、御協力をいただいた各機関および個々の研究者の皆さんに厚くお礼を申し上げます。

本書に収録した資料はもとより北辺資料のごく一部にすぎないが、それらが利用者の関心をひき、未知の資料発掘への手掛りとなれば幸いである。一般に旧記類の内容は書名からの判断が困難なので、この目録では各資料に簡単な説明を付すことにした。それはとくに解題を意図したものではないが、資料探索の際にいささかでも役に立つことを期待している。本書中に北辺地域と関係のない資料が多数含まれているのは、この目録が北方資料室所蔵写本類の棚卸しを兼ねていることのほかに、鶏肋を惜んだためでもある。古地図資料については、すでに『北海道関係地図類目録』中に収録したので、ここでは原則として割愛した。

秋月 俊幸 誌

凡例

- 一 本書は、北海道大学附属図書館の主として北方資料室が所蔵する北辺関係（北海道・樺太・千島・ロシア）旧記類の目録である。但し北辺関係以外の旧記類も、北方資料室所蔵のものに限りその一部を収録した。
- 二 この目録には、他の図書館・文書館もしくは個人所蔵の旧記類を写真複写、電子複写等によって複製した「複写本」が多数含まれている。それらについては底本の所蔵者（機関）名を明記した。
- 三 一般に旧記類というのは、明治維新前に書かれた著作や文書、記録等のことで、そのほとんどは写本（手書本）や木版本であるが、ここでは明治期以後の手稿本や木版・石版・銅版のほか和装の活字本をも採録した。
- 四 北辺関係旧記のうちすでに活字翻刻本の利用可能なものは、できる限り採録するよう努めた。その場合当館にその写本類を所蔵しないものは主記入の欄に、それ以外のものは記載事項末尾の〔註〕の欄に、いずれも㊦をもって刊記等を記した。
- 五 この目録の分類は資料の内容に則した便宜的なもので、資料のもつ多面性のゆえに類似のものがいくつかの分類項目に分れている場合も少くない。検索に際しては関連項目の参照が必要である。各分類中の資料はおおむね成立の年代順に排列されている。
- 六 各書の記載は、索引番号・書名・著編者・成立年・写本版本の種類・丁数・大きさ・資料註記（*）・内容説明（註）・巻次細目・請求記号の順に記した。
- 七 題箋等の外題の書名には後人が付した不適のものが少くないが、それらはすでに資料を同定する際の手掛りになっているので、この目録では原則として書名は題箋からとり、必要と思われる場合には〔註〕の欄に内題、別書名等を註記した。角書きは書名の一部とみなし、文字の大小を区別しなかった。
- 八 著編者を明示しない旧記類についても、それが内容から判断できるものについてはなるべく補記することとした。
- 九 成立年は、序や跋に年月が記されていなくても内容から凡その年代を推定したものがあつた。
- 一〇 写本のうち、著作者自身の自筆であることが明らかなのは「自筆本」あるいは「稿本」と記し、団体等の書類綴については「原本」と表示した。
- 一一 複写本の場合は、底本の写本・木版等の種類と丁数を（ ）で括ってその前に「複写」と記し、*の欄に底本所蔵者（機関）名を記した。
- 一二 旧記の紙数は丁数で表示し、大きさは縦の長さをセンチ・メートル（cm）であらわした。複写本の場合はそのサイズである。

一三 資料註記（＊）の欄には、写本年（者）、木版等の刊記、旧蔵者（蔵書印）など資料の特徴のほか、その資料を合綴する綜合書名などを記した。

一四 旧記類の内容は書名から判断の困難な場合が多いので、この目録では〔註〕の欄で閲覧の手掛りとなるよう簡単な内容説明を付した。

一五 叢書・類書のほか、各冊毎に標題を有する多巻の資料には、〔註〕の次に巻次細目を付した。

一六 請求記号は各記入の末尾に示し、別置状況により次のような略号を用いた。

旧記 主として江戸期の写本・木版本

別 明治以後の写本・木版本等で、十進分類番号を付して別置。北海道・樺太・千島・シベリア・アイヌ資料に分れる

道資料 北海道庁寄託本（主として原本資料）

道写本 北海道庁寄託本（旧北海道史編纂掛写本）

子虚 木村謙次資料

奥平家 奥平家資料

木村 木村時義資料

多気志樓 松浦武四郎資料

菊池 菊池重賢資料

米田 米田和一資料

白石家 白石家資料

伊達家 伊達家文書

村山家 村山家文書

佐藤家 佐藤家文書

田付家 田付家文書

笹浪家 笹浪家文書

松村家 松村家文書

木下家 木下家文書

北・樺・千・シ・ア

上記の文字の前に「別」をつけないものは全て活字本

一七 索引は、巻末に横書きで書名索引と著編者索引を付した。排列はいずれも五十音順である。

一八 この目録では書名、著編者とも漢字は原則として当用漢字を使用した。